

笠野原飛行場の歩み

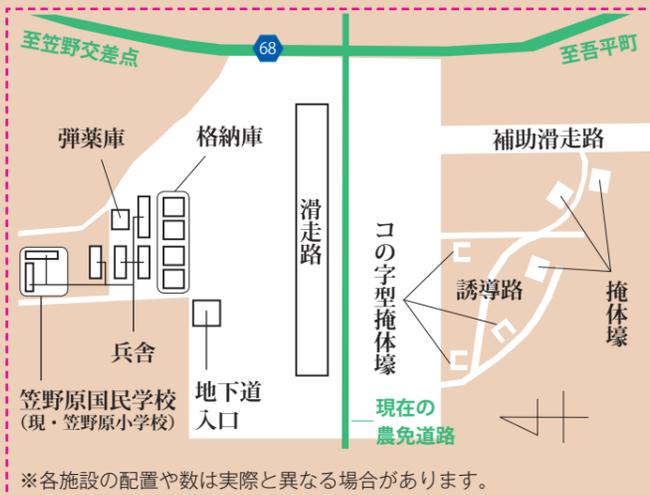
年月日等	内容
大正 11 年	訓練や連絡等に使用した大刀洗陸軍飛行場(福岡県)の離着陸用の民間飛行場として誕生。
昭和 11 年 4 月 28 日	飛行場の名称が海軍によって「笠野原飛行場」と定められる。
昭和 20 年 3 月 18 日	米軍による集中爆撃を受け、壊滅的な被害を受ける。
終戦後	農地として無償で払い下げられる。

永田 良吉 氏 (初代鹿屋市長)

大始良村議会議員時代の昭和 6 年に、鹿児島市の飛行会を視察した際に「これからの戦争は飛行機が勝敗を決める」と直感し、飛行場の誘致に尽力。このことが、後に「ヒコーキ代議士」と呼ばれるきっかけとなりました。



【当時の写真等を基に作成した見取図】



敷地内には東西・南北に 1 本ずつ滑走路が有り、昭和 20 年 1 月には零戦 72 機が、同年 4 月の特攻機による「菊水作戦」展開の時には 184 機が配置されたといわれています。



米軍機が初めて市内を空襲した日に笠野原基地上空西側から撮影した写真(昭和 20 年 3 月 18 日)。

記憶の中の飛行場

～海軍航空隊笠野原基地～

あまり知られてはいませんが、かつて、笠之原町とその周辺には海軍の基地がありました。「笠野原飛行場」は、50ha の土地を農家から借り上げ、大正 11 年に民間飛行場として誕生。昭和 16 年の真珠湾攻撃に参加していた第 2 航空戦隊艦爆撃隊もこの飛行場を使用していました。終戦後は、農地として無償で払い下げられ、飛行場跡には宅地や畑が広がっています。また、当時の記録資料等は処分されてしまい、今ではほとんど残っていません。民家や田畑が並ぶこの地で、住民はどのように生活していたのでしょうか。当時の様子を知る人たちの証言を元にその記憶をたどります。

市ふるさと PR 課 TEL 0994-31-1121

20km の道のりを歩いて 掩体壕作りに通いました

1 か月間の掩体壕作り

昭和 19 年、当時私は 14 歳で高山高等女学校の 1 年生でした。夏休みの 1 か月間は、笠野原飛行場の掩体壕作りの勤労奉仕に行きました。南町の自宅から飛行場までは片道 10 km 以上。移動手段が無かったので、女学校の友人と 5、6 人くらいで歩いて通いました。

空襲で奪われた命

昭和 20 年、自宅には自分たちで掘って作った直径 1 m ほどの防空壕があったほか、近くの山には大人数が入れる防空壕があり、空襲警報が鳴るとすぐさま逃げ込んでいました。爆弾が落ちると、「ドーン！」という地響きのような大きな音と揺れが起きていました。

平和な世の中を願って

終戦後は、食糧不足などで苦しい生活を強いられました。私の願いは、戦争の無い平和な世の中であってほしい、ただそれだけです。戦争を経験してない人に私たちが体験してきたことを伝えるのはとても難しいですが、これからも精一杯伝えていきたいです。

真夏の日差しが照りつける中、頭にかぶる物もありませんでしたが、体調不良を訴える人や文句を言う人は一人もいませんでした。指示されたことを黙々とやる、それが当たり前の時代だったので。

